
梅，ほころぶ頃に

快流緋水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅・ほこうぶ頃に

【NZコード】

N37190

【作者名】

快流紺水

【あらすじ】

大学受験で頑張る弟。それを、ビシバシと応援する姉。スバルタが功を奏したか、無事に合格。しかし、まだ知らないことだらけだった。

おめでたい門松が消え、2月に入ると節分がまづ来て、その後はすぐにバレンタインデーで盛り上がる。

だが、受験生の航太にはまったく関係のこと。

推薦入学の競争に敗れ、いやいや一般受験生として勉強してきて、今月は山場。とはいえ、すでに1日と3日に受けた受験校で合格を貰つたので、気持ちには余裕がある。ただ、本命は15日。おりしもバレンタインデーの次の日がメイン。浮かれてなんかいられない。

『航太！手が止まっている！』

思い切り定規でペシリと手を叩かれた。真っ赤になる手に、思わず顔をゆがめる。

『その攻撃やめろつーの！』

このスバルタなな人は、俺の姉貴・20歳。国立大に通い、その中でトップ。何をしても勝てず、唯一俺が勝てたのは食うことだけ。

『お昼ご飯食べてボーッとしている方が悪い！』

『1回目は言葉してくれよ。』

『したけど、聞いていなかつたのよ。だから、ね。』

にっこりと笑顔で30センチ定規を向けられ、はあつとため息をつく。美人だし、料理も上手い。交友関係も広くて、賢い。

ただ、性格に難あり。

一般受験となつた今、俺の家庭教師としてみてもらつていいけれど、この30センチ定規攻撃は勘弁して欲しい。

『すんませんでした。』

『じゃ、進めるのよ。』

学校の推薦で負けたくらいだから、元々成績がそこまで悪いわけじゃない。でも、受験向きな頭ではない。だから姉貴に習つてているけれど、実際に模試をすれば成績が上がったのも分かるけど、このスバルタはきつい。

俺が英文と格闘している隣で、姉貴は化学かなんかの資料を読んでアンダーラインを引いている。こういう点は助かる。雑誌でも読まれたら気が散つてしまふがいい。

それから3時間みっちり勉強して、姉貴が席を立つた。

『お茶入れてくるからね。40分休憩。』

『はあ～～。』

机に突つ伏すと、姉貴は俺の頭を軽く撫でてから退室した。その手が優しいけれど、定規を握ると怖い。

姉貴は紅茶とリーフパイを持ってきた。珈琲が苦手な俺を気遣つてのことだ、自分もこういうときは珈琲を飲まない。1日中珈琲を飲んでいたいと言つ姉貴がこうして気遣うのを見ると、交友関係が広いのも分かる。だが、ある意味この本当の性格を知つている人間はどれだけいるのか。

『外で自分を演じるつて、疲れない?』

思わず口に出してしまい、姉貴はさすがにびっくりした顔をしてくる。

『演じるつて?』

『いや、なんとなく。』

口を濁すと、姉貴は軽く微笑んだ。悪魔の微笑みのような天使の微笑。

『外でも家でも同じよ。』

『定規で人叩くのかよ!?』

『失礼ね。そこまでやらないわ。でも、大体一緒よ。』

『それでよく彼氏が出来たよな。』

さすがにむつとしたのか、眉間にしわが寄る。そんな顔をしても美人に見えるなんて詐欺だ。

『休憩終わらすわよ?』

『それは嫌だ。前言撤回します!』

『その字が書けたらね。』

白紙とシャーペンを渡され、慌てて書く。ここでミスすれば、本当

に休憩がなくなつてしまつ。

休憩を撤回されずに済み、さらには疲れているだらうつてことで肩もみまでしてくれた。絵的には良い雰囲気。だけど、姉貴の性格は…以下省略。

姉貴と勉強に格闘し、いよいよ受験日。朝が苦手な俺をわざわざ起こしてくれ、しかも駅まで送ってくれた姉貴。思い起こせば姉貴に支えられた受験だったかも知れない。

『落ちたら許さないからね。』

『素直に頑張れとか言つてくれないの?』

姉貴は軽く笑つた。それがまた小気味良いくらい軽やかな声で、別の人気がやつたら文句を言いたくなるが、姉貴の場合嫌味がない。

『それであんたは甘えるでしょ。航太にはこれくらいがいいの。』

『はーい。』

よく分かつてらつしゃる」と。

『ちゃんと受験票と筆記用具を持つてきたでしょ?』

『当たり前だつづーの。』

『名前書き忘れないでよ。長文は疲れないうちにちぎりちぎりと。あと、字は丁寧に。』

『正解しないと意味ないじやん。』

『あなたのミミズみたいな子じや正解でも解読できないかもしねいでしょ。』

ああ言えば、一いつぱい。それにそれ、だけど、当たつているだけに言い返せない。

『元々成績良いんだから、あんたなら大丈夫よ。詰まつたらお姉様を思い出しなさい。』

俺は思わず横目でジトツと見た。なにそれ? 答え分かるわけないじゃん。どんだけナルシスト? てか、俺はシステムじやねーんだけど。

『あほ。』

心の言葉が聞こえたのか、率直に言つてきた。

『私とみつちり勉強したんだから、思い返せば出来るはず…そう言つてるんだけど。』

『あーはい。』

『あ、私のバッグの中に紙袋があるから、それ持つて行きなさい。後ろの座席にあるバッグを引っ張り、そこの中から言われたとおり紙袋を出した。

『お守りよ。ないよりマシだわ。』

口調はぶつかりっぽうでも、気持ちは優しい。

『サンキュー。頑張つてくるよ。』

『お礼は結果でね。行つてらっしゃいー。』

駅のロータリーで俺を降ろした姉貴は、憎いほど綺麗な笑顔で送つてくれた。

合格発表の日。姉貴もついてくると言い張つたが、さすがに恥ずかしくて家に押し込めておいた。合格すれば抱きついてきそうだし、不合格なら周囲を気にせず怒鳴り散らすと思ったからだ。多分、その予想は外れていなかはず。

本当は通知も来るけれど、やつぱり実際の掲示板で見た方が実感が湧くからわざわざ来た。発表時間から1時間もたつてているせいか、人はまばら。この方が落ち着いて自分の番号を探せそうだ。

受験日、正直言つて焦つた。だけど、日本史だけは別。姉貴のポイントが全部出ていて、めちゃくちゃ驚いた。もちろん解けたし、間違えも…多分少ないはずだ。だから、英語と国語のカバーはそれで補えているはず。

本命の大学だけに受験番号を見るのが怖かった。だから姉貴はついてこようといったのか？

そんな考えを頭を振つて振り払い、掲示板の番号を田で追つた。すげー緊張。

受験票と照らし合わせながら見て。

『あー…』

番号があった。同じ番号が確認し、学部もあつてているか確認。それを3回も繰り返し、ようやく落ち着いた。すぐに家に電話し、合格を伝えると周りで喜んでくれている声も聞こえた。

『お礼に』馳走買っていくよ。』

氣前よく言つと、

『無理しないのよ。』

なんて言いつつも嬉しそうな母さんが想像出来た。

家に帰り、テーブルに飯台をつ出した。中には美味しそうなお寿司がずらり。

『高かつたんじゃないの?』

母さんが心配して聞いたが、そんなのお構いなし。

『みんなのお陰で合格出来たわけだしさ。そのお礼だつてば。一番いいやつだぜ。』

『氣前いいじやない。』

姉貴が取り皿やおしじゅ、お箸を持ってきて隣に座つた。

『みつちり教えたかいがあつたわ。頑張ったわね、航太。』

『まーね。さ、食べよーよ。1番良い梅のお寿司だからさー。』

その言葉に家族が白けた。

『え? どうしたの?』

慌てて聞くと、姉貴が横から思い切りはたいてきた。そりやもうよそ見していたら、テーブルに顔を思い切りぶつけているくらいに。

『なんだよ姉貴い! ?』

『このどあほ! 松竹梅で1番格が上なのは松! !』

『え~~~~~! ? ! ? まじかよー! ?』

姉貴はもう一度はたいてきた。そりやもう2回目よりも強く。

『大学合格したってのに、なんでそんなことも知らないのよー。』

『だつて、梅は花が咲いて綺麗だから1番じゃねーのかよおー。あまりに情けない俺の声に、家族全員がため息をついた。大学合格したってのに、この扱いつてなんだよおー?』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3719o/>

梅，ほころぶ頃に

2010年10月18日03時19分発行